

## 研究論文

ナディン・ゴードイマの「ジャンプ」  
における一考察

小 西 弘 信

## A Study of Nadine Gordimer's "Jump"

Hironobu Konishi

## I

Nadine Gordimer (1923–2014) は、南アフリカの作家、政治活動家であり、1991年にノーベル文学賞を受賞した。ウォーレ・ショインカ、ナギーブ・マフフーズに次いでアフリカ大陸出身者として3人目、ゴードイマの受賞は、アフリカ人女性としては初の受賞となった。最初の長編小説は『いつわりの日々』(*The Lying Days*) (1953年)であり、その後、12作の長編小説、200以上の短編作品を発表した。『保護管理人』(*The Conservationist*) (1974年)では、ブッカー賞も受賞している。

ゴードイマは、南アフリカ連邦のジョハネスバーグの東にある鉱山町スプリングスで生まれた。父親はリトアニアからのユダヤ系移民、母親はイギリス系のユダヤ人であった。4歳上の姉がおり、両親との4人家族であった。父親は、ラトヴィア出身の時計職人、のちに宝石商として家計を支えた。母親はロンドン生まれで、ゴードイマの心臓が生まれつき弱いことを酷く心配し、彼女を殆ど学校にやらなかったという。実際、11歳で退学して以降、彼女は学校には通わず、成人後に地元のヴィットヴァテルスラント大学に1年間、聴講生として足を運ぶ程度であった。

自宅で孤独に過ごすことが多かった子ども時代に、その淋しさを埋めたのが読書であったという。その時代に、既に文学の創作活動を始め、ゴードイマの作品が初めて出版されたのは1937年、彼女が13歳の時であった。それは子ども向けの短編“The Quest for Seen Gold”で、1938年、地元紙 *Sunday Express* 紙に載ったことから、文壇デビューを果たす。1951年に雑誌 *The New Yorker* に短編を発表し、彼女の名は国外でも知られるようになった。

爾来、ゴードイマは2012年に発表した最後の小説 *No Time Like The Present* まで、75年もの長期にわたり健筆をふるって創作活動に従事した作家した。2年後の2014

年7月に彼女は90年の生涯を閉じた。

南アフリカは、1961年にイギリス連邦から脱退し、政治上は独立国であった。しかし、近代化や工業化の過程において、政治、経済、文化など社会のあらゆる側面で、人種隔離政策であるアパルトヘイト体制において少数の白人が、黒人を中心とする大多数の非白人を支配し人権を奪い、いわゆる植民地社会であった<sup>1)</sup>。服部典之は、「2 ポストコロニアル性と『本国』の文化—帝国の遺産との格闘」において、南アフリカの人口構成の複雑さについて、以下のように述べている。

この国（南アフリカ）の人種構成をさらに複雑にしているのは、対立が単なる黒人と白人という二極対立に留まっていない点である。…白人にも二種類の出自をもつ民族があり、たがいに対立しているし、黒人のほかにカラードと呼ばれる混血の人たち、それからアジア移民もいる<sup>2)</sup>。

上記にある白人の「二種類の出自をもつ民族」とは、アフリカーナ人（Afrikaner）とイギリス人のことである<sup>3)</sup>。そして、レナード・トブソンは、『南アフリカの歴史』において、白人たちの中のアパルトヘイトに反対する者たちについて以下のように言及している。

選挙権をもつ南アフリカの白人住民のなかには、アパルトヘイトに反対し、自分たちの同胞の白人の良心を喚起しようと試みる者が常にいた。彼らが焦点を当てたのは、アパルトヘイトの理論（分離された自由）と実践（差別と不平等）の矛盾であり、アパルトヘイト国家の残虐行為—パス法、強制移住、住宅逮捕、裁判なしの拘禁—であった<sup>4)</sup>。

上記のような状況下で、ゴードイマも描いた南アフリカの社会は、アパルトヘイトによる植民地状況を反映したものになっている。すなわち、彼女の作品には、南アフリカにおける植民地支配の歴史と、厳しい人種差別政策をとったアパルトヘイトの影響により、複雑な人種関係、ジェンダー関係、そして性関係と、それらに深くかかわって様々な家族関係が描かれているのである。それらは、アパルトヘイト体制下とポストアパルトヘイト時代の世相とその変遷を色濃く反映している。

ゴードイマの作品と同様にアパルトヘイトに反対する文学について、土屋哲は「アフリカ文学の特質と展望」において、以下のように言及している。

…1930年代から始まった現代アフリカ文学の歴史の中に、ネグリチュード運動とパン・アフリカニズム運動の潮流が骨太に流れているという風に私は考えて

いるのだが、もう一つ別の、これらとは全く異質な流れが、南部アフリカに存在しているのである。白人による人種差別（アパルトヘイト）のためである。他の地域では、アフリカ人の自由回復がピークに達して独立国が数多く誕生し、そのため〈アフリカの年〉といわれる1960年以降の世の趨勢に逆らってこの地域では、逆にアフリカ人は自由どころか、人種差別のアパルトヘイト関連立法が強化され、苛烈な弾圧により、非白人の生活は極限状況へと追い込まれてゆくのである。当然のように南アフリカのアフリカ人の文学は一貫して、アパルトヘイトに抵抗する〈反逆の文学〉となる<sup>5)</sup>。

そして、先述のトブソンは、南アフリカでアパルトヘイトを批判する作家たちを以下のように紹介している。

アラン・ペイトンは、1947年、人間味のある人種関係を呼びかける『叫べ、愛する祖国よ』を著わしたが、これはベストセラーになった。ペイトンはまた、1950年代と1960年代に、一連の痛烈なアパルトヘイト批判を出版した。…1970年代までに、アンドレ・プリנק、ナディン・ゴードイマ、J・M・クッツェー、エイソル・フガートといった作家たちは、洞察力のある小説や演劇を通じて、南アフリカの人種主義の破壊的な影響を明らかにした<sup>6)</sup>。

上記の作家たちの中に、トブソンはゴードイマも挙げており、彼女も南アフリカの人種差別に対しての「反逆の文学」として数多くの短編小説や長編小説を世に送り出した作家の一人なのである。

本研究は、1991年に出版されたゴードイマの短編小説集『ジャンプ』(*Jump: And Other Stories*)に収められた「ジャンプ」(“Jump”)において、良心の呵責から黒人政府に投降した白人男性の話をとおして、タイトルである「ジャンプ」のイメージを踏まえて、ゴードイマの本作品の創作の意図を探求するものである。

## II

ゴードイマが人種差別を批判する作家になった経緯には、彼女の人生にとって大きな転機となった二つの出来事があったという。そのことについて、小西智也は「Nadine Gordimer の *The Late Bourgeois World* における『学校』像についての小考」において以下のように紹介している。

彼女 (Gordimer) の人生にとって大きな転機となったのは、1960年に起きた

2つの出来事である。この年、政治的事由によって親友が逮捕され、また、3月21日にはシャープヴィル虐殺（Sharpeville Massacre）が勃発している。Gordimer自身も、南アフリカの政党である「アフリカ民族会議（ANC）」に加わったが、あくまで一般的な政治問題とは距離を置き、非合法活動には一度も参加しなかったという。以降、彼女は一貫して差別的な社会制度に反対し、文学という方法を通じて声を上げるべく、健筆を揮い続けた<sup>7)</sup>。

ゴードイマ自身も、『ナディン・ゴードイマは語る アフリカは誰のものか』において、自分の転機となった幼い時に目撃した人種差別を以下のように語っている。

その当時、黒人のメイドが密造酒をつくっているかどうかを調べるために、しばしば警察の手入れがありました。ある晩、夜中に起きてみると、手に手にたいまつを持った人びとが庭を歩きまわっていました。警官がうちのメイドの部屋に入っていきました。私が二歳のときからいたメイドで、私にとっては第二の母のような人です。彼女の部屋に警官が入っていった、ありったけのものを外へ投げ捨て、ベッドを引っくり返し、とても乱暴な扱いをしたわけです。これを見た私の体験から第二の作品が生まれています<sup>8)</sup>。

上記のように、ゴードイマは人種差別主義を現実として体験し、それが彼女の意識に焼きつけられたのである。そして、彼女は一貫して文学という方法で差別撤廃を発信し続けた。しかも、南アフリカから多くの白人作家たちが亡命しても、彼女は国内に留まって創作活動を衰えることなく続けたのである。

ここでアパルトヘイト崩壊と南アフリカ初の黒人大統領であるネルソン・マンデラ（Nelson Mandela）誕生までを辿ってみる。1913年の原住民土地法から始まったアパルトヘイト政策が、第二次世界大戦後の1948年の総選挙で国民党が勝利したのち、数々のアパルトヘイト法整備により更に体制が強化推進された。しかし、1950年代1960年代には、黒人意識高揚と反政府運動が激化した。1970年代は、南アフリカ政府の弾圧が暴力化したことで、国際社会からの経済制裁と南アフリカの孤立に続いて、1980年代にはアパルトヘイト体制が弱体化した。そして1990年代初めにアパルトヘイト体制崩壊した。南アフリカでは1994年に初の全人種参加の総選挙により、マンデラが南アフリカ初の黒人大統領となり、反アパルトヘイト闘争を主導したアフリカ民族会議（African National Congress）を第一党とする国民統合政府が誕生した。こうして南アフリカの統治体制がアパルトヘイトの絶対主義からマンデラ大統領の下での民主体制に移行した。

ところで、長く創作活動を続けたゴードイマであるが、彼女の作品は、南アフリ

カがアパルトヘイト廃止に向けた政策を打ち立てた1989年以降とそれ以前とは内容が異なっている。1979年の『バーガーの娘』(*Burger's Daughter*)や1990年の『マイ・サンズ・ストーリー』(*My Son's Story*)で、ゴードイマは人種差別体制の中で苦しみながら革命運動に身を投じる人々の姿と、それを弾圧する社会を冷徹にリアルに描いている。

しかし、『ジャンプ』や1994年の『この道行く人なし』(*None to Accompany Me*)が、1989年以降になるので、人種差別法の廃止や政治犯の釈放、人種差別に対する弾圧がゆるめられていく過程における人間の動揺や不安な心理を描いているものとなっている。福島富士男は、『アフリカ文学読みはじめ』において、1990年代に入ってから作品は、その文体がじつに伸びやかで、読者もそれほどの負担を強いられることがなく、小説らしく、普通の速さで読めることを指摘している<sup>9)</sup>。

総じて、南アフリカにおいてゴードイマは弱者の視点から（それが加害者であろうと被害者であろうと）そうした血なまぐさい差別の現実を語るのである。黒人・混血・白人を差別する地に彼女が立っている「語り手」として、豊かな想像力を駆使して語っていることは注目すべきことである。しかも、彼女は人種や肌の色を超えて現象を切り取ることが出来る稀有な「語り手」なのである。

### III

本作は、黒人政府が確立した後、白人右翼グループの反政府運動にいた若い男が、同グループが犯した蛮行に対して良心の呵責から黒人政府に投降し、白人グループの虐殺や少女強姦を明かすことで仲間を売る話となっている。最後の場面で、主人公の若者が若い娘と性交した後、ホテルの六階からジャンプすることを夢想し、地上には彼が見てきた反政府運動によって傷ついた人々がいるのを見て、そこへジャンプすることが今はまだできないことをつぶやいて本作は終わる。

ここからは物語について分析してみる。本作は、先述の尋問や公開スピーチが済んだ後の日々の心のつぶやきを語ったものである。冒頭部分は彼の回想形式になっていて、彼が黒人政府側に投降したあと、その政府によってホテルの一室に閉じ込められたところから物語は始まる。

He is aware of himself in the room, behind the apartment door, at the end of a corridor, within the spaces of this destination that has the name HOTEL LEBUVU in gilt mosaic where he was brought in. The vast lobby where a plastic-upholstered sofa and matching easy chair are stranded, the waiting elevator in its shaft that goes up floor after floor past empty halls, gleaming signs—CONFERENCE

CENTRE, TROPICANA BUFFET, THE MERMAID BAR—he is aware of being finally reached within all this as in a film a series of dissolve passes the camera through walls to find a single figure, the hero, the criminal. Himself. (3)<sup>10)</sup>

ここで、本作は主人公が、一人称で語っていくことで、物語は進んでいく。彼は登場人物であり、ナレーターでもある。ゴードイマは、本作において彼に第一人称の視点で語らせる方法を探ったのである。作品の視点については、先述の『ナディン・ゴードイマは語る アフリカは誰のものか』の中で、ゴードイマはその重要性を、以下のように語っている。

視点の問題ですが、これは私にとっても、ほかの作家にとってもそうだと思いますが、絶対に重要なものです。先ほどテーマについての質問を受けました。あるテーマにとりつかれたとき、いちばん大事なポイントは、その話を進める正しい方法を見出すということです。それは私にとっては、声となって聞こえてこなくてはならないのです。そのストーリーなり、小説なりを語る声がどこからか聞こえてこなければならない。第一人称で誰かが語っているのか。誰かが私の背後にいて、ほかの作中人物を客観的に見ながら語っているのだろうか。そういうことを考えます。全能者の声なのか。あるいは一人の人によって語られるのか。それとも作中人物を多面的に描くために他の人物の視点に移しながらストーリーが進行していくのか。そういうことを考えます。これが小説を書き始めるとき、短編小説もそうですが、まず決定しなければならない大きな問題です。決定は正しくなければなりません。そこで誤った声をきいてしまったら、その小説を正しく進めることができなくなります<sup>11)</sup>。

本作においては、彼の視点で物語を進めることを決定することが、ゴードイマにとって唯一正しい方法だったのである。それによって、彼の独白が読者の心の中に響いていく効果をねらったのである。

ここでもう一つ特記すべきことがある。それは、主人公が一貫して「彼」(“He”)と呼ばれ、名前が明かされていないことである。作品の主要な登場人物である黒人政府の関係者たちも名前は明かされず、「彼ら」(“they”)と呼ばれていることである。作品中では、“The chair faces the wide-screen television set they must have installed when they decided where to put him. (3)” (「椅子はワイドスクリーンのテレビに向かっておかれている。このテレビは彼らが彼をどこかに収容するかをきめたときに、運び込まれたものにちがいない。」<sup>12)</sup> 下線筆者)にあるように、主人公や他の登場人物に名前がなく、作品の舞台も特定化されていない。つまり、本作は南アフリカ

における黒人政府樹立後の反政府集団を裏切ったある男のドキュメンタリーではない。本作は、あくまでも小説であり、ポストアパルトヘイト時の南アフリカであった事態と当事者たちの心情を読者に連想はさせるが、作家が主人公や他の登場人物を明示しないことで、そういった事実性を付与することや、ある特定の出来事として読まれるのを避けることで、物語の展開や構成だけに特化した小説にすることができ、読者に想像させる自由な存在として物語の寓意性を際立たせることが可能になっているのである。

具体的に主人公がどのように語っているかを見てみる。彼が黒人政府に語る反政府運動の白人たちが行ったことは、捕虜や一般人への虐殺と少女たちへのレイプであった。大義を持った反政府運動だったとしても、結局白人たちが行ったことは残虐行為であり、蛮行だったのである。彼が尋問される部屋で、彼はそのことを緊張しながら以下のように語るのである。

There's no one in the room, the curtains are closed against everyone. Swallow. I saw the male refugees captured at the border brought in starving. I saw how to deal with them. They were made to join our forces or were put back over the border to die. I could see that they would die. Their villages burned, their families hacked to death—you saw in their faces and bodies how it really happened...the disinformation. (15)

上記の中で、彼の緊張度は“Swallow.”（「彼は唾を飲み込む」）という一語に印象的に表れているだろう。彼は白人たちが捕虜や村人たちにどのような残虐行為を行ったかがリアルに語っている。次いで、少女たちへの白人たちの仕打ちも、彼はリアリティをもって語るのである。

They carried what I thought were refugee children to be saved from the fighting; girls of twelve or thirteen, terrified, they had to be pulled apart from each other to get them to walk. They were brought in for the men who were receiving their military training. Men who had been without women; to satisfy them. After dinner, the Commander offered me one. He had one led in for himself. He took off her clothes to show me. (16)

読者は、こうした彼の語りに、あの争いの中で生じた人間の恐ろしさや狂気を知ることになる。振り返って、その時の人々の人間性が失われることへの悲しみが“...War isn't pretty.” (16)（「…戦争は美しいものではない」）という彼のつぶやきに

集約されている感がある。読者は、一人称で語っている主人公にだんだんと関心を寄せるようになる。彼はいったいどのような素性を持っている男なのだろうかと思うのである。

主人公の素性は、両親と彼との話の中で明らかにされている。そこで読者は彼が軟禁されるまでの状況と彼の素性を知らされるのである。黒人政府の者たちが、彼をこの国に連れ戻し、首都で生まれ育った彼の子ども時代の話を開き出そうとする。

They've heard about his childhood in this capital, this country to which he has been returned. That he was an ordinary colonial child of parents who'd come out from Europe to find a better life where it was warm and there were opportunities. That it was warm and there was the sea and tropical fruit, blacks to dig and haul, but the opportunity was nothing grander than the assured tenure of a white man in the lower ranks of the civil service. His parents were not interested in politics, never. They were not interested in the blacks. They didn't think the blacks would even affect their lives and his. (7)

主人公は植民地で生まれ育った普通の子どもだった。彼の両親は、良い生活求めてヨーロッパから移民としてこの国に来た一般人だった。そして彼と両親はもともと政治には全く関心がなかった。だから、息子が帝国主義のスパイだと告げられ、政治的に収監されていることを聞いて、彼の両親は“their innocent boy only two years out of school! (8)”（「あの世間知らずの息子が、学校を出てまだ二年しかたっていないというのに！」）と嘆くばかりだった。主人公の親子関係は、南アフリカにヨーロッパからの移民が大勢おり、彼らはいたって普通の人たちであり、国の支配者が黒人に変わるという急展開された政治的状況に戸惑うばかりだった状況を連想させる。

加えて、主人公と母親のやり取りの部分は、現実を忘れさせるような幻想的な世界のように提示され、全体的に暗いトーンの本作に潤いをもたらしているようである。彼の心中には両親を常に気遣う温かな人間味あふれる素質があるようにも見える。それが現実の世界において、期待とは反して収監されたことに怒りを覚え、反勢力の黒人政府に投降するという仲間を裏切るという彼とは相反する感じにさえ思えてくる。以下は、彼が母親に電話している場面である。

It is the day to phone her. It's more and more difficult to keep up the obligation. There's nothing left to tell her, either. From weeping gratitude that he was alive, as time has gone by she has come to ask why *she* should be punished in this way, why he should have got mixed up in something that ended so badly.



Over the phone she says, Are you all right?

He asks after his father's health. Does it look like being a mild winter?

Already the wind from the mountains has brought a touch of rheumatism.

Do you need anything? (Money is provided for him to send to his parents, deprived of their pension; that's part of the deal.) (11-12)

上記の中で母親の“Are you all right?” (11) (「元気なの？」) や “Already the wind from the mountains has brought a touch of rheumatism.” (12) (「山から吹きつける風で、早くもリューマチが疼き始めているわ)」といった息子への気遣い、主人公の“Does it look like being a mild winter?” (12) (「この冬は暖冬だといいね)」や “Do you need anything?” (12) (「なにか要るものは？」) と両親への気遣いがよく出ている。二人の会話も直接話法によって親子の温かい関係が読者に直接伝わってくるようである。言語的には、被伝達部だけで、伝達動詞が一切省かれている描出話法が用いられている。それによって、主人公の回想の中で二人が会話しているようである。

先述のように、政治にも黒人にも関心がなかった両親の下で育った主人公だったが、黒人政府に収監されてからは、彼らに対して憎悪をもつ者になってしまう。これは南アフリカが一見人種差別を超えたと思える国に期待をしていた者たちの失望と嫌悪の声を代弁しているのではないだろうか。

At this point in the telling came the confession that for the first time in his life he thought about blacks—and hated them. They had smashed his camera and locked him up like a black and he hated them and their government and everything they might do, whether it was good or bad. No—he had not then believed they could ever do anything good for the country where he was born. (8-9)

上記の中で、彼の黒人に対する嫌悪の吐露が、ダッシュを用いることで、言葉を選びながら語っているようであり、彼の戸惑いが表れているようである。彼の黒人への嫌悪感は、ゴードイマがこの国を愛しており、それゆえに、彼女が理想とする姿になっていないことへの焦燥感につながっているのではないだろうか。楠瀬佳子は『南アフリカを読む』の中で、白人はアフリカ人に対する潜在的な恐怖を持っていることを指摘している。

ゴードイマの作品の中心的なテーマはアフリカ人に対して抱く白人の潜在的な恐怖であり、その恐怖に直面した時の心的反応を容赦なくえぐり出そうとする。そして軽妙な筆致と文学的技巧を凝らして、アパルトヘイトが、南アフリカの

すべての人々の生活と心理に与える影響を明らかにしていく。確かな歴史的認識に裏づけられているために、ゴーディマが行う現状分析と近未来の展望が一層リアリティと普遍性を持つものとして立ち現れてくる<sup>13)</sup>。

黒人政府の彼らと主人公との尋問と応答のやりとりは、互いが対立し合うような緊迫した冷たい感じで展開されている。尋問する側の彼らの言葉は少なく、応答する側の彼の言葉は多い、そこに彼の心情も付け足されているからである。

Report back on the morale of our men being trained there in the use of advanced weapons and strategy.

Yes?

A crescendo comes in great waves from the speaker provided with the tape player: to win the war, stabilize by destabilization, set up a regime of peace and justice!

During press conferences, at this point an ooze of heat would rise under his skin. Their eyes on him drew it up from his tissues like a blister. And then? (15)  
(下線筆者)

上記の下線部が尋問する側の台詞である。言葉は節約され、あたかも被告人にに対する判事のような権威的な面も感じられるようである。

主人公が反政府運動の白人たちによる一般人への残虐行為を語った後、彼が革命運動の暴力性についての想いを“Of course, it was war...War isn't pretty. There is brutality on both sides. I had to understand. Tired to.” (16) (「もちろん、あれは戦争ではありましたが……。戦争は美しいものじゃない。こちらの側にも残酷性はある。ほくはそう思い込まなければならなかった。そう努力しました」)とやるせない気持ちで語るのである。そこも主人公が本来は暴力的なことは好まないという人間性を感じさせている部分である。

柳沢由美子は、本作で描かれている革命運動に関して「白人政権が崩壊し黒人が政権を握ると今度は白人が政府転覆を図る。人種間の権力争奪戦はまだ終わっていない」<sup>14)</sup>と述べている。ゴーディマは、南アフリカが白人と黒人とで共栄共存する国にはなることに懐疑的だったのではないだろうか。支配者と被支配者というサイクルは永遠に回り続けるのではないかという諦めに近い気持ちがあったのではないだろうか。峯陽一は、『南アフリカ 「虹の国」 への歩み』において、実際に総選挙の後の南アフリカには先行きの不透明感を抱えていることを指摘している。

南アフリカは「良くなる」のか「悪くなる」のか。現在の不安定な均衡状態は、いつまで持続するのだろうか。これは、よりよい社会の建設のための助走なのか、それとも嵐の前のつかの間の平安なのか。先行きの不透明感は、多くの南アフリカ人に強いフラストレーションを感じさせている<sup>15)</sup>。

上記のように峯が言及するのは、現在の南アフリカの体制への不満が少しずつ蓄積されていると感じるからである。さらに峯は、「アフリカーナー、カラード、インド人の下層労働者たちは、力をつけてきたアフリカ人との競争を恐れている。生活が改善する見通しを感じることができないアフリカ人の失業青年のあいだでは、ANCの多人種協調路線への反発が拡大しつつある」<sup>16)</sup> という現実があることを追記している。

#### IV

本作のタイトルは「ジャンプ」(“Jump”)であり、この言葉は最後の場面では、“Jump.”と単立した一語として、シンボリックに出てくる<sup>17)</sup>。本作の最後に主人公が若い娘と性交した後、ホテルの六階からジャンプすることを夢想し、日中は閉じている自室のカーテンを開ける。彼がジャンプする先の地上には、死にかけている老人、ゴミ捨て場を漁っている孤児、耳のない男たち、腕を失った女たちがいる。彼らこそ、革命運動の戦いで彼が見てきた犠牲になった黒人たちであった。そして、地上にいる彼らのどよめきが、6階にいる彼のところまで立ち上ってくる。結局のところ、彼は彼らがいる地上に向かってジャンプできないのである。

He can't go out because they are all around him, the people.

Jump. The stunning blow of the earth as it came up to flexed knees, the parachute sinking silken.

He stands, and then backs into the room.

Not now; not yet. (20)

本作の「結びの語句」<sup>18)</sup>である“Not now; not yet.”(「まだだ、まだできない」)はとても印象的な台詞である。そうしようと思ってもできないという彼のありのままの気持ちである。そこには、彼の言いようのない不安と迷いの気持ちが表れている。

ところで、「ジャンプ」という言葉は、この場面以前にも出てくる。最初は、主人公が思春期になった頃にパラシュート・クラブに入った時である。“...as an adolescent he bounded with his peers through joining the parachute club, and he jumped

—the rite of passage into manhood” (7) (「十代の思春期には、パラシュート・クラブに属して友達と親しく付き合った。そして彼はジャンプした——大人への推移の儀式だった」)。ここでは、「ジャンプ」することが「大人への推移の儀式」の意味を持っていた。次は、思春期を終えて、彼が建築家の製図工の見習いとして弟子入りした時である。“He was apprenticed as draughtman to an architect by then (more prestigious than accountancy) and his weekend hobby, in addition to jumping from the sky, was photography.” (7-8) (「その頃には、彼は建築家に製図工（会計士よりも社会的な地位は上）の見習いとして弟子入りしていた。彼の週末の趣味は、空からジャンプすることに加えて、写真を撮ることだった」)。「ジャンプ」は「週末の趣味」であり、彼にとって生きがいになっていた。

そして、三つ目の「ジャンプ」は、主人公の母親が彼に宛てた手紙で、“*You had to go jumping from up there.*” (12) (「あなたは高いところからジャンプすると言ってきかなかった」)と彼の若い頃を回顧している中に出てくるのである。このように若い頃の彼には、「ジャンプ」があったのである。

これらの「ジャンプ」が、シンボリックに意味するところは何か。若い頃の「ジャンプ」は、子どもが、高いところから「ジャンプ」したがる習性を持っていることを連想させるだろう。しかし、本作の最後で主人公は「ジャンプ」をしようと“*He pulls aside the curtains to left and right.*” (20) (「カーテンを左右に開ける」)のである。そこで彼は現実の世界を見てしまう。すると「ジャンプ」への意思も消えてしまい、不安と迷いの気持ちから「ジャンプ」を未遂で終わらせてしまうのだった。社会や世界の様々な現実を認識してしまうと、「ジャンプ」はもうできなくなるのである。つまり、彼は希望と理想を失い、不安と迷いだけの大人になってしまったのである。彼にとっての希望と理想とは何か。それは、国を司るものが白人から黒人になっても、その先に、白人と黒人とが共存共栄する国の誕生だったのではないだろうか。その未来への「ジャンプ」はまだ実現に向かっていないのである。

アパルトヘイトが撤廃されても、南アフリカの異人種が平和に共存する政策はやっとスタートラインついたばかりであり、それが実現するためには、異人種同士が、人種の垣塙に向かってジャンプしないといけないことは明らかだろう。しかし、その希望や理想は抱いていても、実際に南アフリカの人々が、この人種の垣塙に向かってジャンプすることはまだ難しいのである。

物語を通して、ゴードイマは、たとえ良心にしたがって行動した白人ですら、異人種の中に飛び込むことは容易ではないことを述べているのではないか。アパルトヘイトが法律上は消えても、その実態はまだ残っており、異人種同士による共存共栄は未完成のままであると現実を述べているのではないだろうか。しかし、異人種同士の共存共栄の理想の国を現実に成立させるためには、どちらも異人種に向かっ

てジャンプすることを試し続けなくてはならないことも伝えたいのではないだろうか。

ゴードイマは、生涯の創作活動を通じて、一貫して批判的リアリズムの姿勢を崩さず、現実をきびしくコミットしながら、作家としての自らの成長と併行して黒人の成長をも鋭く見つめ、アパルトヘイトの現実とその推移を凝視し続けたのである。あらためて、ナディン・ゴードイマとは、どのような作家だったのだろうか。彼女は南アフリカの激動の時代に、体制派の抑圧にも屈せず、反体制派の要望にも媚びず、あくまでも作家としての自由を死守する姿勢をくずしていない強固な意志を持った作家だった。彼女は、文学を通して、アパルトヘイトという国家的な人種差別体制を批判するだけでなく、そこで自分が白人として生きることも厳しく問い直す白人作家であった。

最後に、ゴードイマが絶えず書き続けてきたことについて述べてみたい。南アフリカにおいて政治的に厳しい状況でも、そうした創作活動を駆り立てたものは何かという質問に対して、彼女は「私の場合は…人生をより深く理解するためには書くことが不可欠です。私は生まれてこのかた、九歳、十歳ごろからずっと書き続けています。したがって、書くということは、世界とかかわり合う私なりの方法なのです」<sup>19)</sup>と回答している。ゴードイマの「人生を深く理解するために書き続ける」というモットーが創作活動のバックボーンであり、彼女こそ文学を通して、人類が真に共存共栄できるという理想の未来の成就に向かって「ジャンプ」し続けた作家だったのではないだろうか。

#### 注

- 1) 服部典之は、南アフリカの人種とアパルトヘイトについて、「南アフリカは、『人種』という点で複雑な構成をもった国である。人口比10%強の白人が、南アフリカ共和国の土地の実に90%を所有している。白人の6倍の数を占める黒人はその残りの土地に居住しているわけだ。この不均衡な状態は、『アパルトヘイト』（人種隔離政策）によって産み出された。アパルトヘイトは、国際社会からの大きな非難の声にもかかわらず、20世紀後半までつづけられた」と述べている。（服部典之、「2ポストコロニアル性と『本国』の文化—帝国の遺産との格闘」、木村茂雄編『ポストコロニアル文学の現在』、晃洋書房、2004、p.26）
- 2) 同上、p.26。
- 3) 服部は、「アフリカーナ人（Afrikaner）とは、17世紀に東インド会社を創設したオランダから移り住んだ白系移民の子孫たちで、もとはボーア人と呼ばれていた人びとであり、彼らが話す言語はアフリカーンス語（Africans）である」と説明している。（同上、p.26）
- 4) レナード・トンプソン、宮本正興他訳『世界歴史叢書 南アフリカの歴史（新

- 装版)』, 株式会社明石書店, 2009, p. 361。
- 5) 土屋哲, 「アフリカ文学の特質と展望」, 平野敬一・土屋哲編『コモンウェルスの文学』, 研究社出版株式会社, 1983, p. 159。
  - 6) トンプソン, 前掲書, p. 363。
  - 7) 小西智也, 「Nadine Gordimer の *The Late Bourgeois World* における『学校』像についての小考—『英文学領域』としてのアフリカ文学研究」, 『外苑春秋』第8号, 國學院高等学校, 2018, p. 137。
  - 8) ナディン・ゴーディマ, 高野フミ訳『ナディン・ゴーディマは語る アフリカは誰のものか』, 岩波書店, 1993, p. 10。
  - 9) 福島富士男, 『アフリカ文学読みはじめ』, (株) スリーエーネットワーク, 1999, p. 195。
  - 10) 引用したテキストは次の版であり, ( ) の数字は, そのテキストのページ番号を表す。Nadine Gordimer, "Jump." *Jump: And Other Stories*. (New York: Farrar Straus Giroux., 1991)
  - 11) ゴーディマ, 前掲書, 1993, p. 32。
  - 12) 小論の「ジャンプ」の日本語訳は, ナディン・ゴーディマ (柳沢由美子訳) 『ジャンプ他十一篇』(岩波書店, 2014) から引用した。
  - 13) 楠瀬佳子, 『南アフリカを読む: 文学・女性・社会』, 第三書館, 1994, p. 91。
  - 14) 柳沢, 「訳者解説」, 前掲書, p. 335。
  - 15) 峯陽一, 『南アフリカ 「虹の国」 への歩み』, 岩波新書, 1996, p. 43。
  - 16) 同上, pp. 42-43。
  - 17) 土屋哲は, ゴーディマ著『戦士の抱擁』の「解説」において, リアリズムに徹した作風のゴーディマだったが, その作風が『保護管理人』あたりから変化していることに気づき, 1984年彼女と会った際に, 作風の変化について尋ね, 彼女から「そうです。テクニクの面で言葉に彫琢を凝らすようになったこと, symbol というものを大切にするようになったこと, その点で変わってきたと思います」という回答を得たことを紹介している。さらに, 土屋は「このリアリズムからサンボリズムへの変身に, ゴーディマの<現実>離れに, 彼女の最近の創作姿勢を解くカギがあるようにわたしは思う」と追記している。(土屋, 「解説 南アフリカの人種差別とゴーディマの文学」, ナディン・ゴーディマ (土屋哲訳) 『晶文社セレクション 戦士の抱擁』, 株式会社晶文社, 1985, p. 188)
  - 18) 土屋は, ゴーディマの作品の結びの語句のシンボルをどう読み解くかによって, ゴーディマの作品の価値が決まってくることは過言ではないことを指摘している。(同上, p. 188)
  - 19) ゴーディマ, 前掲書, 1993, pp. 7-8。